宮本輝が解く宮本輝

宮本氏の小説・エッセイは大学・高校や、中学校の入学試験に使用されています。これまで数多くの児童・生徒が、宮本氏の文章をもとにした試験問題を解いてきました。実は本人も試験に挑んだ一人。雑誌にて「宮本輝が挑む入試問題」という企画を行った際、東北大学の入試問題（「螢川」より出題）にチャレンジしました。

「オレは作者やでぇ、満点に決まっとるやないか」と言った宮本氏。試験前日は酒を断ち、精のつくスッポンを食べ、起床時間も調整して臨みましたが、結果は100点満点中32点。試験後に「『小走りで』に傍線引くなよ」と言うなど、試験問題とは相性が良くない様子。

問一
傍線の箇所(1)「重竜が最後に春枝の名を呼んだことを話そうとして」とあるが、それはなぜか、その理由を五十字以内で述べよ。

問二
傍線の箇所(2)「阿保らしゅうなって」とあるが、なぜそのような気持になったのか、その理由を五十字以内で述べよ。

問三
傍線の箇所(3)「たまらんほど悲しいなってきて」とあるが、なぜそのような気持になったのか、その理由を六十字以内で述べよ。

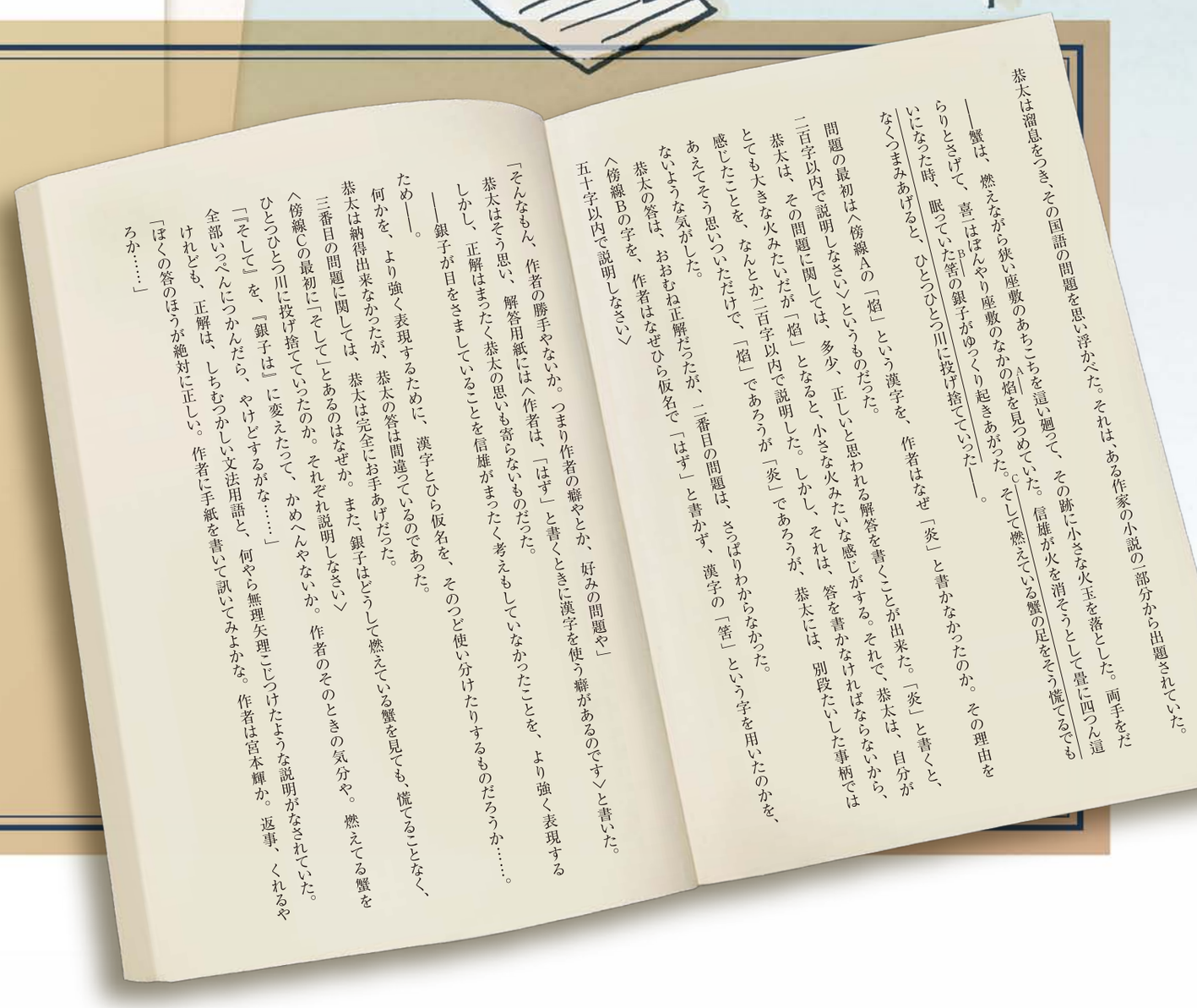
問四
傍線の箇所(4)「とっさにそう言って」とあるが、それはなぜか、その理由を七十五字以内で述べよ。

問五
傍線の箇所(5)「小走りでついていった」とあるが、それはなぜか、その理由を四十字以内で述べよ。

一九九五年度 東北大学文系前期・国語

小説にも登場する試験問題

宮本氏は『彗星物語』という小説の中で、登場人物の恭太に国語の入試問題を解かせていますが、その問題に使用されているのが『螢川』。恭太の回答も宮本氏と同様に、あまり思わしい結果が得られません。「しちむつかしい文法用語と何やら無理矢理こじつけたような説明がなされて」いる模範解答に納得がいかない恭太。作者に手紙を出すことも考えるほど不満のようです。



恭太は溜息をつき、その国語の問題を思い浮かべた。それは、ある作家の小説の一部分から出題されていた。

――蟹は、燃えながら狭い座敷のあちこちを這い廻って、その跡に小さな火玉を落とした。両手をだらりとさげて、喜一はぼんやり座敷のなかの焔を見つめていた。信雄が火を消そうとして畳に四つん這いになった時、眠っていた箸の銀子がゆっくり起きあがった。そして燃えている蟹の足をそう慌てるでもなくつまみあげると、ひとつひとつ川に投げ捨てていった――。

問題の最初は〈傍線Aの「焔」という漢字を、作者はなぜ「炎」と書かなかったのか。その理由を二百字以内で説明しなさい〉というものだった。

恭太は、その問題に関しては、多少、正しいと思われる解答を書くことが出来た。「炎」と書くと、とても大きな火みたいだが「焔」となると、小さな火みたいな感じがする。それで、恭太は、自分が感じたことを、なんとか二百字以内で説明した。しかし、それは、答を書かなければならないから、あえてそう思いついただけで、「焔」であろうが「炎」であろうが、恭太には、別段たいした事柄ではないような気がした。

恭太の答は、おおむね正解だったが、二番目の問題は、さっぱりわからなかった。

〈傍線Bの字を、作者はなぜひら仮名で「はず」と書かず、漢字の「箸」という字を用いたのかを、五十字以内で説明しなさい〉

「そんなもん、作者の勝手やないか。つまり作者の癖やとか、好みの問題や」

恭太はそう思い、解答用紙には〈作者は、「はず」と書くときに漢字を使う癖があるのです〉と書いた。

しかし、正解はまったく恭太の思いも寄らないものだった。

――銀子が目をさましていることを信雄がまったく考えもしていなかったことを、より強く表現するため――。

何かを、より強く表現するために、漢字とひら仮名を、そのつど使い分けたりするものだろうか……。

恭太は納得出来なかったが、恭太の答は間違っているのであった。

三番目の問題に関しては、恭太は完全にお手あげだった。また、銀子はどうして燃えている蟹を見ても、慌てることなく、

〈傍線Cの最初に「そして」とあるのはなぜか。それぞれ説明しなさい〉

ひとつひとつ川に投げ捨てていったのか。それぞれ説明しなさい〉

「『そして』を、『銀子は』に変えたって、かめへんやないか。作者のそのときの気分や。燃えてる蟹を全部いっぺんにつかんだら、やけどするがな……」

けれども、正解は、しちむつかしい文法用語と、何やら無理矢理こじつけたような説明がなされていた。

「ぼくの答のほうが絶対に正しい。作者に手紙を書いて訊いてみよかな。作者は宮本輝か。返事、くれるやろか……」

参考文献：「宮本輝：新潮四月臨時増刊」（1999年、新潮社）
「彗星物語」（文庫、下）p.108-110（1995年、角川書店）